女子跳馬における採点規則の改訂に伴う諸問題について

山　田　まゆみ

1　はじめに

体操競技の世界選手権大会は，２年毎に定期的に開催されていたが，1992年のバルセロナオリンピック以後，毎年開催（1992年パリ，1993年バーミンガム，1994年ブリスベン）されている。世界選手権大会では，従来団体総合選手権，個人総合選手権，種目別選手権が行われるが，上記の３つの大会では個人総合選手権，種目別選手権の競技会として開催されたため，自由演技のみの変則的な大会となっている。

従来体操競技の団体総合選手権では，正式なチームとして５～６名の選手がエントリーされ，それぞれの種目にはチーム全員が参加した。その内最高５得点（ベスト５）が合計されチーム得点となった。しかし1993年の競技規則改訂（FIG： Federation International Gymnastics)により正式なチームは５～７名の選手がエントリーされ，種目毎に出場可能な選手は６名までであり，その内チーム得点はベスト５という新しい方式が採用された。この方式は従来通り４種目演技する選手と，４種目演技をしなくても良い選手が出てくることになった。

体操競技で頂点を窮める様な選手とは，女子では規定４種目，自由４種目の合計８種目において，勝れた実力がなければならないという考えがなされていた。しかし自由演技のみの大会が開催されたり，４種目出場せずに得意種目を実施することにより，チームメンバーとして大会に参加することが可能になり，ある種目だけに勝れた能力を発揮するスペシャリストにも体操競技のチャンピオンとしての門戸を開くことになった。また，全世界の選手が１つの演技に対して理想を求め，その出来映えを競う規定演技について，FIGは1996年アトランタオリンピック以後廃止を決定している。

バルセロナオリンピック以後２年間という短い期間であるが，1993年に競技規則の改訂，採点規則の改訂がFIGによって行われたことにより，体操競技の内容は根本から大きく変わろうとしている。

本論では，跳馬の自由演技について，採点規則改訂に伴う技の変遷に的を絞り，採点規則改訂による国際的動向とその問題点を明らかにし，今後のトレーニングや審判活動に寄与することを目的とするものである。

2　研究方法

採点規則1985年版，1985年版，1993年版の跳馬に関する内容を比較考察した。さらに1987年から1994年までの世界選手権大会の跳馬の演技をVTRを用いて比較考察した。対象とした世界選手権大会は下記の通りである。

・1987年世界選手権大会（ロッテルダム）
　個人総合選手権　35名・68跳躍
　（１選手２跳躍，１跳躍不明・１跳躍ミス）
　＊以後ロッテルダムWCと称す
・1991年世界選手権大会(インディアナポリス)
　個人総合選手権　34名・67跳躍
　(1選手2跳躍，1跳躍不明)
　＊以後インディアナポリスWCと称す
・1994年世界選手権大会（ブリスベン）
　個人総合選手権　23名・46跳躍
　(1選手2跳躍)
　＊以後ブリスベンWCと称す

表Ⅰ－Ⅰ　採点規則の変遷（女子跳馬変更部分の抜粋）

項目	１９８５年版	１９８９年版	１９９３年版
１一般規則	踏切板での踏切は －助走から －ﾛﾝﾀﾞｰﾄ から	－助走から －ﾛﾝﾀﾞｰﾄ から	－助走から －一要素から
２跳躍技グループ	ｸﾞﾙｰﾌﾟ1:前転とび、側転とび等 ｸﾞﾙｰﾌﾟ2:前方宙返り系 ｸﾞﾙｰﾌﾟ3:後方宙返り系 ｸﾞﾙｰﾌﾟ4:ﾛﾝﾀﾞｰﾄ から	ｸﾞﾙｰﾌﾟ1:倒立回転とび ｸﾞﾙｰﾌﾟ2:前方宙返り系、ｸｴﾙﾎﾞとび ｸﾞﾙｰﾌﾟ3:後方宙返り系 ｸﾞﾙｰﾌﾟ4:ﾛﾝﾀﾞｰﾄ から	ｸﾞﾙｰﾌﾟ1:倒立回転とび ｸﾞﾙｰﾌﾟ2:前方宙返り系、ｸｴﾙﾎﾞとび ｸﾞﾙｰﾌﾟ3:後方宙返り系 ｸﾞﾙｰﾌﾟ4:ﾛﾝﾀﾞｰﾄ から
３跳躍技の価値点	A跳躍技　．9.00まで B跳躍技　9.10～9.50まで C跳躍技　9.60～9.90まで D跳躍技　10.00 表示違反 -0.30（主審）	A跳躍技　．9.00まで B跳躍技　9.10～9.50まで C跳躍技　9.60～9.90まで D跳躍技　10.00 表示違反 -0.30（主審）	A跳躍技　．9.00まで B跳躍技　9.10～9.50まで C跳躍技　9.60～9.70まで D跳躍技　9.80～9.90まで E跳躍技　10.00 表示違反 -0.30 STC/EXP
４特別要求（種目特有の要求）	競技IbおよびⅡにおいて２回演技することができる ２回の実施のうち良い方の点が有効点となる ２回の跳躍技は異なった跳躍技でも同一でもよい 競技Ⅲにおいては跳躍技番号の異なる２つの跳躍技を実施しなければならない 決定点は２回の実施の平均とする $\frac{\text{競技Ia+Ib}}{2}$ ＋競技Ⅲの2演技の平均点	競技IbおよびⅡにおいて２回演技することができる ２回の実施のうち良い方の点が有効点となる ２回の跳躍技は異なった跳躍技でも同一でもよい 競技Ⅲにおいては異なった跳躍技ｸﾞﾙｰﾌﾟの２つの跳躍技を実施しなければならない 決定点は２回の実施の平均とする	競技Ibにおいては２回演技することができる（２つの跳躍技は異なった跳躍技でも同一でもよい） ２回の実施のうち良い方の点が有効点となる 競技Ⅱにおいて２回の実施が必要 ２回の跳躍技は異なった跳躍技でも同一でもよい 競技Ⅲにおいては異なった跳躍ｸﾞﾙｰﾌﾟの２つの跳躍技を実施しなければならない 選手は自由演技の前に跳躍技番号の表示をしなければならない
５種目特有の減点	支持局面 －姿勢欠点（体・脚）　0.20まで －支持が長すぎる　0.30まで －支持局面で腕がまがったまま　0.50まで	支持局面 －姿勢欠点（体・脚）　0.20まで －支持局面での技術不良　0.20まで	支持局面 －支持局面での技術不良　0.20まで －片手だけの支持　1.00 －触れない　3.00

表Ⅰ－2　採点規則の変遷（女子跳馬変更部分を抜粋）

項目	１９８５年版	１９８９年版	１９９３年版
５種目特有の減点	第２空中局面 －姿勢欠点（体・脚）　0.20まで －規定されたひねりが不十分または時期が早すぎる　各 0.30まで －不十分な高さと距離　各 0.50まで －着地前に体が伸びない　0.30まで －不十分な姿勢（かかえ込み、屈身、伸身）0.20まで その他の減点 －跳躍を実施しない助走 ・踏切板に触れる　無効 ・踏切板に触れない　第5条参照 （規定は最大2回、自由は最大3回まで）	第２空中局面 －姿勢欠点（体・脚）　0.20まで －規定されたひねりの時期が早すぎるまたは不十分　各 0.30まで －不十分な高さと距離　各 0.50まで －着地前に体が伸びない　0.30まで －不十分な姿勢（かかえ込み、屈身、伸身）0.20まで その他の減点 －跳躍を実施しない助走 ・踏切板または跳馬に触れる　無効 ・踏切板と跳馬に触れない　第5条参照 （規定は最大2回、自由は最大3回まで） ・競技Ⅰaでの3回目の試技に対して　*0.50 ・競技Ⅰb，Ⅱ、Ⅲでの4回目の試技に対して　*0.50 *主審より減点	第２空中局面 －規定されたひねりの時期が早すぎるまたは不十分　各 0.30まで －不十分な高さ　0.50まで －不十分な距離　0.30まで －不十分な姿勢（かかえ込み、屈身、伸身）0.30まで －着地前の体の開き、伸ばしが遅い0.50まで その他の減点 －跳躍を実施しない ・踏切板または跳馬に触れる　無効 ・競技Ⅰaで3回の助走で演技を行う　0.50 －規定演技の解説違反　無効 －競技Ⅰb，Ⅱ，Ⅲで規定演技を行う　無効 －踏切前に2つ以上の要素を行う　無効 －跳躍番号の表示違いあるいは番号を表示しない　0.30
６種目特有の減点（種目特有の要求の欠如）	－規定演技の解説違反　無効 －踏み切る前に2つ以上の準備動作を行う　無効 －競技Ⅲのおいて *1回のみの演技 演じられた跳躍の点数を2で割る *2回とも同一技 2つの点の平均から1.00 減点する *　主審による減点	－規定演技の解説違反　無効 －競技Ⅰb，Ⅱ，Ⅲで規定演技を行う　無効 －競技Ⅲのおいて ・1回のみの演技 *実施された演技の得点から1 00 ・同一グループからの2回の演技 *2回の演技の平均点から1.00 競技Ⅲでの種目特有の要求に対する減点は主任審判員によって行われる *主任審判による減点	－競技ⅡⅢで1回のみの演技 演技された跳躍技の得点÷2＝最終得点 －競技Ⅲにおいて同一の跳躍技グループから2回の演技あるいは2回とも同じ跳躍技の演技 2回の演技の平均点－1.00＝最終得点 種目特有の欠如に対する減点はSTC/EXPによって行われ、セクレタリーによってコンピューターに打ち込まれる

3　採点規則改訂について

採点規則1985年版，1989年版，1993年版の跳馬に関する内容の中から変更部分を中心に抜粋し，まとめたものが表１－１，表１－２である。

①一般規則に関して

踏切板での踏み切りは，1985年，1989年版では「助走から」と「ロンダートから」となっているが，1993年版では「助走から」と「一要素から」になっている。この「一要素から」という規則になると，ロンダートに拘ることなく他の要素からの踏み切りも認められる可能性もあり，将来的に新技が開発されることも考えられる。

②跳躍技グループに関して

1989年版よりグループ２（ひねりを伴う，またはひねりを伴わないない前方宙返り系およびひねりを伴う，またはひねりを伴わないクエルボとび）にクエルボとびが追加された。これは，1985年版にクエルボとびが記載されていないのではなく，グループ３（ひねりを伴う，またはひねりを伴わない後方宙返り系）の後方宙返り系の技に属していたためである。

③跳躍技の価値点に関して

1993年版より難度要素がＡからＥまでになったため，跳躍技の価値点が変更になった。特にＣ難度以上の跳躍技が3段階(C,D,E)に分けられ，10.00満点の価値を得るには，Ｅ難度(最高難度)の跳躍技を実施しなければならなくなった。

④特別要求（種目特有の要求）に関して

競技Ｉｂ(団体総合選手権自由演技)に対する要求は変更されていない。競技II（個人総合選手権）に対しては，1985年，1989年版では２回の実施のうち良い方の点が有効点となったが，1993年版では２回の実施の平均点となり，今まで以上に要求が厳しくなり安定した実施を求めていることが理解できる。競技III（種目別選手権）では，1985年版で跳躍番号の異なる２つの跳躍技を要求しているが，1989年版からは異なった跳躍技グループから２つの跳躍技を要求している。1985年版を適用し跳躍を実施した場合，同じ課題の技で空間での体勢変化（屈身，あるいは伸身など）させることにより要求を満たすことができるが，1989年版以後は，他のグループの異なった課題の跳躍技を要求し，総合的な実施能力を要求するようになったといえる。

⑤種目特有の減点に関して

1985年，1989年版では，各局面に対する姿勢欠点の減点法が記載されているが，1993年版には記載されていない。これは姿勢欠点を採点の対象としないのではなく，「第９条一般欠点」の減点表を適用するため，種目特有の減点には記載されていない。

支持局面に対する減点の中で，最も大きな改訂部分は1993年版の「片手だけの支持…1.00」「触れない…3.00」という内容である。一般規則の中には「すべての跳躍技は馬上に両手を支えて実施しなければならない」とあり，言うまでもなく跳馬の運動特性は手足の交互性[1]にあるはずである。今回新しく追加されたこの２つの項目については，跳馬運動の本質を無視するような矛盾が指摘できる。これらの矛盾点がありながらも２つの項目を採用した背景には，ロンダートからの跳躍技のめざましい発展とそれに伴う危険性が考えられる。グループ４の技は，ロンダートから後方に倒立回転しながら着手する技が中心になっており[2]，背面踏み切りから着手するために着手局面の安定化は難しく，競技会の様な場においてさえ着手ミスが往々に見られる。しかし第二空中局面については，ツカハラとび以上の雄大性を示す宙返りが実施されており，世界の多くの選手によって志向されているためFIGは片手のみの支持，あるいは馬上に手が触れなくても無効にせず得点を出す方向に採点規則を改訂したと思われる。[3]第二空中局面では高さと距離に対する減点が毎回変更になっている。1985年版では，「不十分な高さと距離…各0.50まで」1989年版では各0.30までと改訂されており，高さと距離に対する減点が少し緩和されている。しかし1993年版では「不十分な高さ　0.50まで」「不十分な距離　0.03まで」と改訂され，高さに対する要求を強調している。また空間での姿勢に対し1993年版では「不十分な姿勢　0.30」とし，不正確な体勢での実施に対し，より厳しい減点を要求している。

1985年，1989年版の「着地前に体が伸びない 0.30まで」は，1993年版では「着地前の体の開き，伸ばしが遅い 0.50まで」に改訂され，減点が0.50までと大変厳しい内容になった。このことからFIGはどの様な跳躍技に対しても着地前の先取り動作を十分に行い着地するように方向づけしていると考えられる。

その他の減点について1985年版では,「跳躍を実施しない助走」に対し，助走のやり直しについては規定は最大2回,自由は最大3回までとなっているが,1989年版は0.50の減点の適用により規定は3回，自由は4回目の助走を実施できる。1993年版では，規定は0.50の減点適用により最大3回まで，自由は減点なしで最大3回の助走が許される。

⑥種目特有の減点(種目特有の要求の欠如)に関して

1993年版では，競技IIにおいて1回のみ跳躍を実施した場合,演技した跳躍技の得点の1/2が最終得点となる。さらに競技IIIにおいて，1回のみ跳躍を実施した場合,演技した跳躍技の得点の1/2が最終得点となり，これは1985年版と同様に改訂されている。

以上跳馬に関する採点規則上の改訂部分を比較したが，採点規則1985年版と1989年版ではあまり大きな差は見られない。しかし，1993年版では改訂された部分は多く，内容は大きく変化したと言える。特に重要な部分として下記の3点があげられる。

・跳躍技がA難度からE難度までに分けられた

跳躍技の実施状況に直接影響する価値点の設定と関係する。

・支持局面の減点において,「片手だけの支持」「触れない」を無効にせず，減点を行い得点を出す様に変更

体操競技の本質を問う問題であり，あまり好ましい改訂内容ではない。FIGとして，より慎重に考えてほしい部分である

・第二空中局面の減点において,「高さ」に対する要求と,「着地前の体の開き，伸ばしが遅い」という項目の追加

技の理想を追求するための捌き方に関する内容であり，実施面と採点に大きな影響を与える。

4 跳躍技の実施状況について

3回の世界選手権大会で実施された全跳躍技と，それぞれの実施回数並びに各大会での価値点をまとめたものが表2である。

採点規則1985年版を適用したロッテルダムWCで実施された跳躍技は16種類である。その中で一番多く実施された技はロンダート後転とび一後方伸身宙返り1回ひねりの25跳躍であり，全体の36.7%を占めている。その他に多く実施された技はグループ3の伸身ツカハラとび，かかえ込みツカハラとび1回ひねり，伸身ツカハラとび1回ひねりであり，グループ2では前転とび−1/2ひねり後方かかえ込み宙返りである。これらの技の価値点は，伸身ツカハラとび以外総て10.00である。跳躍技グループではグループ2が12跳躍，グループ3が18跳躍，グループ4が38跳躍実施され，グループ4は全体の52,9%に達している。跳躍技の価値点では，当時その時点で9.80が1種類1跳躍，9.90が4種類14跳躍，10.00が11種類53跳躍であり，10.00の技は全体の77.9%である。跳馬の自由演技では，1選手2跳躍実施する。この大会では価値点9.80の技が1跳躍のみ実施されているが，その他はすべて9.90以上の技が実施されている。したがって35名全員が9.90以上の技を実施していることが理解できる。注目すべき技はロンダート後転とび一後方伸身宙返り2回ひねりである。

採点規則1989年版を適用したインディアナポリスWCで実施された跳躍技は11種類である。その中で一番多く実施された技はロンダート後転とび一後方伸身宙返り1回ひねりの38跳躍であり，全体の56.7%である。その次に多く実施された技は，前転とび一前方屈身宙返りである。この2つの技は価値点10.00であるが，前転とび一前方宙返り系の技の価値点が0.10引き上げられたために10.00の価値点になったものである。跳躍技グループではグループ2が17跳躍，グループ4は45跳躍実施され全体の67.1%である。ロッテルダムWCにおいては，グループ3の技が18跳躍実施されているのに対し，インディアナポリスWCでは1回の実施もない。これは1989年版採点規

表２　個人総合選手権大会跳躍技一覧表

跳躍技	ロッテルダム		インディアナポリス		ブリスベン	
	回数	価値点	回数	価値点	回数	価値点
前転とび－前方かかえ込み 宙返り	1	9.80	3	9.90		9.70
前転とび－前方かかえ込み 宙返り1/2 ひねり	2	9.90	3	10.00		9.80
前転とび－前方屈身宙返り		9.90	5	10.00	8	9.80
前転とび－前方屈身宙返り1/2 ひねり	1	10.00	2	10.00	8	9.90
前転とび－1/2 ひねり後方かかえ込み 宙返り	6	10.00	3	9.90		9.80
前転とび－1/2 ひねり後方屈身宙返り	2	10.00	1	10.00		9.90
伸身ツカハラとび	6	9.90		9.70		9.60
かかえ込みツカハラとび１回ひねり	6	10.00		9.90		9.70
伸身ツカハラとび１回ひねり	6	10.00		10.00		9.80
ロンダート 後転とび－後方かかえ込み 宙返り		9.40	1	9.40		9.40
ロンダート 後転とび－後方伸身宙返り	2	9.90	2	9.70		9.60
ロンダート 後転とび－後方かかえ込み 宙返り１回ひねり	4	10.00	2	9.90		9.70
ロンダート 後転とび－後方伸身宙返り１回ひねり	25	10.00	38	10.00	8	9.80
ロンダート 後転とび１回ひねり －後方かかえ込み 宙返り◎	1	10.00		10.00		9.80
ロンダート 後転とび１回ひねり －後方屈身宙返り ◎	1	10.00		10.00		9.90
ロンダート 後転とび－後方伸身宙返り１1/2 ひねり	1	10.00		10.00	4	10.00
ロンダート 後転とび－後方伸身宙返り２回ひねり	2	10.00	2	10.00	4	10.00
ロンダート 後転とび1/2 ひねり －前方屈身宙返り ※	2	10.00				9.90
ロンダート 後転とび－1/2 ひねり 前方かかえ込み 宙返り					2	9.70
ロンダート 後転とび1/2 ひねり －前方かかえ込み 宙返り※					2	9.80
ロンダート 後転とび－1/2 ひねり 前方伸身宙返り					8	10.00
ロンダート 後転とび1/2 ひねり －1/2 ひねり 後方屈身宙返り ※					2	10.00

注）各大会の出場者はロッテルダム36名，インディアナポリス36名，ブリスベン24名である
※ロンダート後ろとび1/2ひねり＝ロンダート後転とび1/2ひねり
正式な体操用語では「ロンダート後ろとび1/2ひねり」であるが，ここでは採点規則に示された技名をそのまま用いた
◎ロンダート後ろとび１回ひねり＝ロンダート後転とび１回ひねり
正式な体操用語では「ロンダート後ろとび１回ひねり」であるが，ここでは採点規制に示された技名をそのまま用いた

則により，伸身ツカハラとびの価値点が9.90から9.70に下げられ，ツカハラとび系で10.00の価値のある技は１回ひねり以上のひねり，あるいは２回宙返りを行わなければならなくなった。しかしツカハラとびで２回ひねりや２回宙返りへの発展は大変困難であり，ロッテルダムWCにおいて，ロンダート後転とび－後方伸身宙返り２回ひねりが実施されたことにより，ロンダートからの跳躍技へと集中したのではないかと思われる。第二空中局面で後方宙返りを行う技として，ツカハラとびと，ロンダート後転とび－後方宙返り系の技があげられるが，２回ひねりの技が出現したことにより，前向きで踏み切るツカハラとびよりも，後ろ向きで踏み切るロンダートからの跳躍技の方が鋭い着手と雄大な第二空中局面を保証

されたことになり，今後の発展性を期待できる技として位置づけられたことになる。したがってロンダート後転とび－後方伸身宙返り２回ひねりの技が出現したことにより，ツカハラとびの時代は終了したと言えるのではないだろうか。跳躍技の価値点では，この大会時点で価値点9.40の技が１種類１跳躍，9.70が１種類２跳躍，9.90が３種類11跳躍，10.00が６種類50跳躍実施され，価値点10.00の技は，全体の74.6％に達している。この中で9.40の１跳躍，9.70の２跳躍はすべて異なる選手によって実施されており，34名全員が価値点9.90以上の技を実施していることが理解できる。

採点規則1993年版を適用したブリスベンWCで実施された跳躍技は10種類であり，多く実施された技は下記の通りである。

・前転とび－前方屈身宙返り……８跳躍
・前転とび－前方屈身宙返り　1/2ひねり……８跳躍
・ロンダート後転とび－後方伸身宙返り　１回ひねり……８跳躍
・ロンダート後転とび－　1/2ひねり前方伸身宙返り……８跳躍

跳躍グループではグループ２が16跳躍，グループ４が30跳躍実施され，グループ４は全体の65.2％に達している。跳躍技の価値点は9.70が１種類２跳躍，9.80が３種類18跳躍，9.90が１種類８跳躍，10.00が４種類18跳躍であり価値点9.90以上の実施は58.6％である。この大会では23名全員が２回の跳躍に同じ技を実施している。採点規則1993年版より個人総合選手権の得点は，「２回の実施の平均点とする」に改訂されたために，確実に得点を得ることが第一の目的となったためではないかと思われる。ロッテルダムWC，インディアナポリスWCでは，全員が価値点9.90以上の技を実施しているのに対し，ブリスベンWCでは9.70から10.00と価値点に大きな差が生じている。また，ロッテルダムWC，インディアナポリスWCではロンダート後転とび－後方伸身宙返り１回ひねりに実施が集中しているが，ブリスベンWCでは1つの技への集中は見られない。これらの原因として，1993年版において価値点の大幅な変更が原因ではないかと思われる。跳馬の技の傾向として，グループ４の技が多くの選手により実施されてきたが，その中でロンダート後転とび－後方伸身宙返り１回ひねりの価値が10.00から9.80に変更になり，この技を基本とした発展技で10.00の価値を得るには，第二空中局面において11/２ひねり以上のひねりを実施しなければならない。この様な技術を簡単に習得するのは難しく，そのために１つの技に集中しなかったのではないかと思われる。またグループ２については，屈身姿勢で行う技のみが実施されている。

以上採点規則改訂に伴う跳躍技の実施状況を比較したが，採点規則改訂に伴い，選手に志向された跳躍技に明らかな変化が見られ，これらの実施状況の変化には２つの原因が考えられる。１つは技の優位性の問題である。後方宙返りを課題とする技としてツカハラとびとロンダートからの跳躍技が発展してきたが，ロッテルダムWCにおいてロンダートからの跳躍技が今後の発展性を望める技として注目された。さらにツカハラとび系の価値点が低くなったために，ツカハラとびの実施はなくなり，後方宙返りを課題とする技はロンダートからの跳躍技が主体となった。次に価値点の設定があげられる。採点規則改訂に伴う跳躍技の変化は，細かい規則の改訂よりも跳躍技の価値点の改訂が最も大きな影響を与えていると思われる。選手がトレーニングを行う上で，どのような技を習得すべきか判断するのは大変難しい。しかしその中の１つの条件として跳躍技の価値点があげられる。競技会の場では，実施減点が同等であれば価値点の高い技を実施した選手が有利になる。したがって価値点に差がある限り，より高い価値の技へと志向されるのは当然であろう。

5　採点規則改訂に伴う問題点

採点規則1985年版から1993年版までの価値点の変遷をまとめたものが表３－１，３－２，３－３である。グループ１については，世界選手権での実施がないため対象外とした。

1993年版では，価値点の大幅な改訂と，新しい技が追加されているが，価値点10.00の技が非常に少ない。それは，難度要素がA難度からE難度までになった事が最大の原因である。採点規則1985年版や1989年版のように，価値点10.00の技が多い場合は，その

表３－１　採点規則改訂に伴う跳躍技の価値点変化

跳躍技	価値点		
	1985	1989	1993
前転とび－前方かかえ込み宙返り	9.80	9.90	9.70
前転とび－前方かかえ込み宙返り1/2 ひねり	9.90	10.00	9.80
前転とび－前方屈身宙返り	9.90	10.00	9.80
前転とび－前方屈身宙返り1/2 ひねり	10.00	10.00	9.90
前転とび－1/2 ひねり後方かかえ込み宙返り	10.00	9.90	9.80
前転とび－1/2 ひねり後方屈身宙返り	10.00	10.00	9.90
前転とび－前方かかえ込み宙返り１回ひねり	10.00	10.00	10.00
前転とび－前方伸身宙返り1/2 ひねり	10.00	10.00	10.00
第一空中局面でかかえ込みまたは屈身前方宙返りして前転とび	10.00	10.00	
第一空中局面で前方宙返りして前方宙返り	10.00	10.00	
前転とび－1/2 ひねり後方かかえ込みあるいは屈身宙返り1回ひねり 以上	10.00	10.00	10.00
1/2 ひねり倒立回転とび－1/2 ひねり前方かかえ込み宙返り	10.00	10.00	9.90
１回ひねり前転とび－前方かかえ込み宙返り		10.00	10.00
前転とび－前方かかえ込み２回宙返り		10.00	10.00
第一空中局面で前方宙返りをして－前転とび１回ひねり	10.00		
前転とび－前方伸身宙返り			10.00

技の捌き方の優劣，難易度，実施減点を含め採点上序列がついていた。しかし，現在のように価値点に大幅な差が生じている場合には，始めからある程度勝負がついてしまう。したがってどの様な捌きをしたのかということよりも，どれだけ難しい技を実施したかということが採点の前提条件になってしまう。採点規則1993年版では，新しい技が追加されているが，このような技の価値点が9.70や9.80であれば，その技への取組意欲は低下してしまう。価値点については，体系論的な判断も大切であるが，希少性や今後の発展性も考慮して価値点を決定する必要があるのではないかと思われる。さらにある程度技が普及した段階で体系論に基づいた価値に設定すると良いのではないだろうか。

個技では，グループ３の中より伸身ツカハラとび1/2ひねり(9.70)と，1/2ひねり倒立回転とび1/2ひねり前方伸身宙返り(10.00)，[4]グループ４ではロンダート後転とび－後方伸身宙返り1/2ひねり(9.70)と，ロンダート後転とび－1/2ひねり前方伸身宙返り(10.00)の価値点に問題があると思われる。これらの技は第二空中局面において「1/2ひねりを伴う宙返り」という共通課題がある。この課題の中で，ひねりの時機により前方宙返りを優勢に行うか，後方宙返りを優勢に行なうか捌き方の違いである。この様な技は他にもあり，一般的な技としては前転とび－前方かかえ込み宙返り1/2ひねり(9.80)と，前転とび－1/2ひねり後方かかえ込み宙返り＝クエルボとび(9.80)があげられる。男子採点規則では，これらの前転とび－前方宙返りひねりとクエルボとびは，同じ基礎点として位置づけられており，その理由としては左右軸回転とひねりの時機に対する判断が困難なためである。したがって，上記の技のように運動課題が同じで捌き方が異なる場合，２つの技は同じ価値点として位置づけられるべきである。伸身ツカハラとび＝9.60，伸身ツカハラとび１回ひねり＝9.80であるならば，伸身ツカハラとび1/2ひねり＝9.70は妥当な価

表３－２　採点規則改訂に伴う跳躍技の価値点変化

跳躍技	価値点		
	1985	1989	1993
伸身ツカハラとび	9.90	9.70	9.60
かかえ込みツカハラとび１回ひねり	10.00	9.90	9.70
屈身ツカハラとび１回ひねり	10.00	10.00	
伸身ツカハラとび１回ひねり	10.00	10.00	9.80
かかえ込みツカハラとび１1/2 ひねり	10.00	10.00	9.90
屈身ツカハラとび１1/2 ひねり	10.00	10.00	
伸身ツカハラとび１1/2 ひねり	10.00	10.00	10.00
ツカハラとび後方かかえ込み２回宙返り	10.00	10.00	10.00
ツカハラとび後方屈身２回宙返り	10.00	10.00	10.00
第一空中局面で１1/2 ひねり、後方伸身宙返り１回ひねり・11/2 ひねり	10.00		
第一空中局面で１1/2 ひねり、後方宙返り（体勢は任意）		10.00	10.00
屈身ツカハラとび1/2 ひねり			9.60
伸身ツカハラとび1/2 ひねり			9.70
~~1/2 ひねり倒立回転~~とび－1/2 ひねり前方伸身宙返り ※			10.00
ツカハラ			

※正式な技名は「1/2 ひねり倒立回転とび－1/2 ひねり前方伸身前返り」であるが，ここでは 1994 年世界選手権大会新技リストにより示された技名とグループをそのまま用いた

値点だと言える。しかし，1/2ひねり倒立回転とび－1/2ひねり前方伸身宙返りの価値点は10.00であり，伸身ツカハラとび1/2ひねりと同じ運動課題で捌き方が異なる技としては0.30価値点が高いことになる。また，ロンダート後転とび－後方伸身宙返り＝9.60，ロンダート後転とび－後方伸身宙返り１回ひねり＝9.80であるならば，ロンダート後転とび－後方伸身宙返り1/2ひねり＝9.70は妥当な価値点だと言える。

しかし，ロンダート後転とび－1/2ひねり前方伸身宙返りの価値点は10.00であり，ロンダート後転とび－後方伸身宙返り1/2ひねりと同じ運動課題で捌き方が異なる技としては0.30価値点が高いことになる。

ツカハラとびは第二空中局面における後方宙返りを特徴[5]とする技であり，ロンダートからの跳躍は，背面踏切りにその独自性を出しながらツカハラとびと同様に後方宙返りを主体に発展してきた技である。しかし前方宙返り系に発展する道も開かれ，これらの技を多くの選手に普及させるためにも前方宙返りへと発展した技の価値を少し引き上げることは理解できる。しかし価値点を引き上げる幅が問題である。FIG は1989年版において，グループ.2 の前転とび－前方宙返り系の価値を1985年版より0.10引き上げている。このような前列の他に，今後の発展技の可能性も加味して価値点を決定することも大切ではないかと考える。1/2ひねり倒立回転とび－1/2ひねり前方伸身宙返りとロンダート後転とび－1/2ひねり前方伸身宙返りに関して，今後の発展性を望む事は大変難しいと思われる。なぜならば，ひねりの度数を増加させた場合，後方宙返りひねりとの区別が困難になるからである。以上のことから，1/2ひねり倒立回転とび－1/2ひねり前方伸身宙返りと，ロンダート後転とび－1/2ひねり前方伸身宙返りの価値点は9.80が妥当と思われる。以上価値点に関する具体的な問題点を述べた。

現在の跳馬運動において，跳躍技の価値点は非常に大きなウェイトを占めている。価値点が上下する

表３－３　採点規則改訂に伴う跳躍技の価値点変化

跳躍技	価値点 1985	1989	1993
ロンダート後転とび－後方伸身宙返り	9.90	9.70	9.60
ロンダート後転とび－後方屈身返り１回ひねり	10.00	10.00	
ロンダート後転とび１回ひねり－倒立回転とび１回ひねり ◎	10.00	10.00	9.70
ロンダート後転とび－後方かかえ込み宙返り１回ひねり	10.00	9.90	9.70
ロンダート後転とび－後方伸身宙返り１回ひねり	10.00	10.00	9.80
ロンダート後転とび１回ひねり－後方かかえ込み宙返り ◎	10.00	10.00	9.80
ロンダート後転とび１回ひねり－後方屈身宙返り ◎	10.00	10.00	9.90
ロンダート後転とび－後方屈身返り1/2 ひねり			9.60
ロンダート後転とび－1/2 ひねり前方かかえ込み宙返り			9.70
ロンダート後転とび－後方伸身宙返り1/2 ひねり			9.70
ロンダート後転とび1/2 ひねり－前方かかえ込み宙返り ※		10.00	9.80
ロンダート後転とび－1/2 ひねり前方屈身宙返り			9.80
ロンダート後転とび1/2 ひねり－前方かかえ込み宙返り1/2 ひねり ※			9.90
ロンダート後転とび－後方かかえ込み宙返り１1/2 ひねり			9.90
ロンダート後転とび1/2 ひねり－前方屈身宙返り ※	10.00	10.00	9.90
ロンダート後転とび1/2 ひねり－1/2 ひねり後方かかえ込み宙返り ※			9.90
ロンダート後転とび－後方伸身宙返り２回ひねり		10.00	10.00
ロンダート後転とび１回ひねり－後方伸身宙返り ◎	10.00	10.00	10.00
ロンダート後転とび－後方伸身宙返り１1/2 ひねり	10.00	10.00	10.00
ロンダート後転とび－後方かかえ込み宙返り２回ひねり			10.00
ロンダート後転とび－1/2 ひねり前方伸身宙返り			10.00
ロンダート後転とび1/2 ひねり－1/2 ひねり後方屈身宙返り ※			10.00
ロンダート後転とび1/2 ひねり－前方伸身宙返り ※			10.00

※ロンダート後ろとび 1/2 ひねり＝ロンダート後転とび 1/2 ひねり
正式な体操用語では「ロンダート後ろとび 1/2 ひねり」であるが，ここでは採点規則に示された技者をそのまま用いた
◎ロンダート後ろとび１回ひねり＝ロンダート後転とび１回ひねり
正式な体操用語では「ロンダート後ろとび１回ひねり」であるが，ここでは採点規則に示された技者をそのまま用いた

事により，１つの跳躍技の実施が増えたり，大幅に減少する事もある。このことから価値点により世界の動向を操作することが可能になるが，それゆえに価値点の設定は最も重要な内容である。

技の理想を追求するための内容として,「着地前の体の開き，伸ばしが遅い」という減点項目が適用されたが，このことにより技の捌き方に工夫が必要となると同時に，伸身姿勢で行う技が多くなるのではないかと思われる。跳馬は他の種目と異なり一技一演技である。１つの技のみで価値点が決定するために，どれだけ難しい技が出来るかということが前提条件になり，測定競技的な内容になる事も考えられる。したがって，採点の現場ではどのような捌きを良しとするのか，どのような出来栄えの運動経過

であったのかを常に大切にしながら採点することを忘れてはならない。

6 まとめ

採点規則改訂に伴う技の変遷に的を絞り，採点規則改訂による国際的動向とその問題点について明らかにした。

採点規則改訂に伴い，選手に志向された跳躍技に明らかな変化が見られた。これらの実施状況の変化には，価値点の改訂が最も大きな影響を与えていると思われ，今後も価値点に差がある限り，より高い価値の技へと志向されるのは当然であろう。また，跳躍技の優位性の問題により，同じ課題を持つ技であれば，今後の発展性を望める技が志向されていくのは当然である。

価値点の設定については，採点規則1993年版において問題となる跳躍技の価値点があるが，体系論に基づいた判断だけでなく，技の希少性や今後の発展性も加味して価値点を決定することも大切ではないかと思われる。

競技会の場において，実施される技の価値点に大幅な差が生じている場合，どれだけ難しい技が出来るかということが採点の前提条件になることも考えられるが，採点の現場では，どのような捌きを良しとするのか，どのような出来栄えであったのかという採点競技の本質を追求することを忘れてはならない。 今後の課題として，グループ4の跳躍技について，体系論に基づいた技の分類と跳躍技の価値点について研究を進めてみたい。

注

1) 文献6 P88
2) 文献8 P21
3) 文献8 P21
4) 文献7 P33
5) 文献7 P35
6) 文献4 P35

引用参考文献

1.日本体操協会「採点規則」女子1985年版
2.日本体操協会「採点規則」女子1989年版
3.日本体操協会「採点規則」女子1993年版
4.日本体操協会「採点規則」男子1993年版
5.FIG 競技規則 1993年版
6.金子明友：体操競技のコーチング 大修館書店 昭和49年
7.塩野克巳：跳馬におけるロンダートからの踏切りのもつ問題性 東京女子体育大学紀要 第24号 1983年
8.山田まゆみ：女子跳馬における国際動向と日本の問題点について 日本体操協会研究部報第73.74合併号 1995年
9.FIG：1994年世界選手権大会新技リスト